



静岡県内の幼児教育の質の向上を目指して

# わっ!ぴよん通信

発行・編集 静岡県幼児教育センター

TEL054-221-3287 FAX054-221-3558

## ～地域に根ざした保育実践「自然体験は園児も保育者も楽しさいっぱい」～

### 園訪問から 静岡市立清沢こども園

静岡大学の田宮縁教授を講師に迎え、他園からの参加者4名を加えて園内研修が行われました。

清沢こども園は、市街地から北へ19km、山あいの中腹に生涯学習交流館と合築された木造平屋の園舎です。前を流れる黒俣川のせせらぎや朝の光が心地よく、6名の園児たちは伸び伸びと竹馬やブランコ、10日後に控えた運動会のリズム表現遊びを楽しみ、一日がスタートしました。

今日は、全員で川に行つて遊びます。年中児3名は釣り遊びへの興味が高まっていました。小麦粉や飼育している鶏が産んだ卵、蜂蜜等を混ぜて魚の餌を作り、自作の竹釣竿を持って出掛けました。黒俣川には、ハヤの幼魚が元気に泳いでいます。「いた、いた!」「ほら、あそこ。」とハヤの群れに近づきますが、逃げてしまいます。水に濡れて落ちてしまった餌を付け替えながら何度も挑戦します。そのうち「ばっしやーん!」、しりもちをついてしまったAちゃん。笑っています。すぐに着替



え、今度はたもてつかまえようとBちゃんと別の場所でハヤを探します。周りの大人たちのはしゃぐ声に二人の気分も高まり、数匹捕まえることができ大満足です。Cちゃんは先生と一緒に根気よく釣糸を垂れていました。後で、「釣れるかなあつて思つてやっていたから楽しかった。」と振り返っていました。

事後の協議では、参観者が付箋に記入した感想や意見がカテゴリーごとにまとめられ、多くの成果を確認することができました。保育者が園児ときちんと向き合っている日常の積み重ねや、こっこ遊びがアリティーを帯びて園児のやる気、本気を促していること、実体験の中の気づきを大切にしていること、保育構想(指導計画)がしっかりとされていること等が、園児一人一人思いが異なるものの、同じ行動に向かい目的を見出し遊び込んでいく姿になっていると検証されました。

## ～健康な心と体、自立心を育む保育～

### 園訪問から 広幡こども園 (藤枝市)

さわやかな秋晴れの空の下、173名の3歳以上の園児が園庭いっぱいには広がり、ダンスや体操、走ること、そして鉄棒や雲梯、タイヤ跳びなどのチャレンジ遊びを楽しんでいます。大勢の園児一人一人が偏ることなくいろいろな運動遊びを行うことにより、健康な心と体、自立心が育つように。毎日の日課に組み込まれています。ここに笑顔で走る姿や友達と競う姿、ゆっくりペースの友達を気遣い走りを緩める姿の中に、走ることが大好きという気持ちが表れていました。また、歯を食いしばり力を込めて雲梯を握りしめる手、軽快にたくさんのタイヤを跳び越え誇らしそうな顔、何回も逆上がり挑戦する姿に、一人一人が自分なりに目標をもって取り組む様子が伺えました。



保育室、遊戯室では、発表会に向けて劇遊びが繰り広げられていました。お面や衣装を身にまとい登場人物になりきっています。「私はトマト姫、あの子はキャベツ王子、野菜の国でね、……。」と役柄やあらすじを嬉しそうに話し始めたAちゃん。普段からお姫様になつて遊ぶことが好きなのでしよう。気に入った役になりイメージしたことを得意げに表現して楽しんで

いる姿が目につかびます。各保育室には、イメージを共有したり小道具やせりふを創り上げていたりするために必要な材料や用具、掲示が工夫されていました。

前身の広幡幼稚園は、昭和34年に地区住民の要望により『地区の幼稚園』として誕生しました。在園児の多くが隣接する広幡小学校区から通園し、地域との連携は必要不可欠です。保護者アンケートの結果から改善策を検討する中で、保育参観の期間や時間を配慮し、普段の保育の様子をより多くの保護者に見てもらおうとしました。園は保護者の相談相手になつていくという子育て支援に関する評価は高まり、それは同時に保育者の教材研究や省察力を高め、保育の質の向上につながっていることを実感しているとのことでした。

さわやかさん インタビューコーナー

熱海市立第二小学校  
校長 藤本 真二



① これまでの経歴を教えてください。

熱海市立泉小・中学校長から、静岡県教育委員会義務教育課幼児教育センターの立ち上げの2年間を室長として務めた後、熱海市立第二小学校長として今年3年目の勤務をしています。

② 幼児教育の魅力について教えてください。

子どもによって心や体の成長は異なります。幼児教育では一人一人のちがいを受け入れることから始まり、個に応じた教育とその支援や社会性の伸長を図っています。教科や教科書がない教育なので、幼児教育の先生方一人一人が教育環境そのものです。都市部、山間部など、地域の環境を生かしつつ、教育課程を創造できるところが、幼児教育の醍醐味であり、難しいところでもあるかと思います。

③ 幼小接続への思いや願いを教えてください。

今年は、新1年生にとっては大変厳しいスタートとなりました。初めの2ヶ月はスタートカリキュラムを進めようとしていた矢先の休校。幼児教育で培ってきた資質・能力を、小学校生活に生かしたかったのですが、不十分な出発となりました。

小学校の校長として今年度の事態で気付いたことは、(当たり前のことかもしれませんが)接続は幼小においても小小においても大いに必要であるということです。実践方法をあげると、新学年開始まもなく、前年度の担任が新学級において授業(幼教論なら小1生活科)を行い公開することで、前年度の学級文化を伝えることができるのではないのでしょうか。その文化を生かすも生かさないも、あとは新担任の腕次第とはなります。幼児教育においても小学校教育においても、積み重ねを生かして、4月5月に学級文化を形成することが1年の計を左右するものと考えます。

保育のWA！～インクルーシブ保育の視点から～

めぐみ先生 教えてね

クラスづくりのポイントは



クラスに「気になる子」がいると、担任は、大きく2つの点で「何とかしなければ！」という気持ちになります。ひとつは、その子自身の発達促進の観点からであり、もうひとつは、クラス運営の観点からです。そのバランスが取れなくなると、一生懸命な保育者ほど「自分の力不足ではないか。」と、うっかり自分を責めてしまうこともあります。そこで、今回は「気になる子」を含めたクラスづくりのポイントを整理します。



① 個への働きかけ

先生や友達と一緒に過ごしたい」という気持ちを育てましょう。ポイントは、気になる子自身の気持ちや考えを保育者が代弁することです。通常、「周りの子は、こう思ってるよ。」や「先生は、こうして欲しいんだけど」と他者の気持ちを代弁することが多いのですが、説明を受けている本人は、自分の気持ちを理解してもらえないもどかしさを感じ、悪循環に陥ります。身近に良き理解者がいると分かれば、好転します。

② クラス全体で考える

友達との過ごし方について、全員で考えましょう。「友達と仲良くしよう」という目標だけでなく、「なぜ仲良くしなければいけないのか。どうしたら、仲良くできるのか。どんなふうに過ごしたいか。」を、年齢に応じて納得できるように話し合います。そこから生まれたルールを、毎日の中で確認できる仕組みを作るとさらに効果的です。

③ 行動のモデル

クラスの中で、望ましい行動の連鎖を作りましょう。保育者が、子どもに対して「いつでも手を貸すよ」という姿勢を示すと、子どもたちなりに真似をし始めます。クラスにバディ(相棒)が増えることで、困ったときは誰もが助け合える関係が作られます。

常葉大学保育学部 赤塚めぐみ

「静岡県版幼小接続モデルカリキュラム」 追加事例を WEB ページに掲載しました  
事例7 「うごくおもちゃをつくりたい(5歳児)」 事例8 「スタートカリキュラムの全体構想」  
事例9 「富士市版スタートカリキュラム」 事例10 「アドバイザー訪問後の見取りの発信」



詳しくは「静岡県就学前教育情報発信サイト わっ!」をご覧ください。

<https://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-060/youzi/top.html>